大巌寺宝物殿ニュース　第20号

当山『日鑑』に見る行事の諸相 ⑦ 千部修行（1）

大巌寺住職　長谷川 匡俊

千部修行（以下「千部」と略す）とは、「千部会」ともいわれ、手元の『新纂浄土宗大辞典』の「千部会」の項によれば、「僧侶が五〇〇人、千人、あるいは一人で一つの経の読誦が千回になるよう誦経する、祈願や追善の法要。千部、千部経、千部読経ともいう。鎌倉時代にすでにみられるが、明暦三年（一六五七）江戸大火の後両国の回向院で、増上寺二三世遵誉貴屋が諸宗の僧を集め、七日の間千部の経を読誦する大法会を修したという記録がある」とみえる。

実際に行われた「千部」は、当該寺院の格式や規模等によってさまざまであろうが、通常の年中行事にくらべて、実施期間も長く、僧侶の動員人数も多い。したがって諸費用も多額に上る半面、多くの浄財が寄せられたと察せられる。では、当山の場合はどうであろうか。

史料上の初見は享保八年（一七二三）七月の「大巌寺千部興行寄附之事」（『大巌寺文書』四巻二三六頁）と題する文書である。つぎに読み下しにして掲載する。

一、合せて金百四十三両一歩　但し新金なり

右は、享保四亥年以来、毎年千部読経執行せしめ、諸人勧化の切をもって、今寄付するものなり。これにより右金子利分並びに千部中の施入を合わせ、出勤の僧侶の施物となし、山門の所化を在堪せしめるための助成とす。もちろん施物の多少は収納の増減に随い、臨時の了簡たるべし。これらの趣をもって、千部読経毎歳欠けることなく興行せしめ、後々に至るまで異変無き旨、こいねがうものなり

享保八癸卯歳七月　　到誉恵哲㊞

生実　大巌寺十九世

さて、この記事から読み取れることは、①千部は享保四年（一七一九）以来毎年実施されてきたこと。②その間に寄せられた寄付金は金一四三両一歩であったこと。③これからはこの財源運用の利子分と千部中の布施収入を合算して、行事に出仕した僧侶への法礼や檀林所化（学徒）の学業継続の支援にあてるが、その金額は寄付収入の増減によること。④以上の趣旨を遵守し千部が毎年行われるよう切に願う。当山第十九世到誉恵哲上人代のことである。

その後四十年近く、記録がないので千部の実態は不明だが、つぎに記録に登場するのは『宝暦・明和年間覚書帳』（『覚書』と略す）と筆者が題した古記録の中においてである。内容の紹介などは次号以降に譲り、取り扱う史料との関係で今後の見通しを述べておこう。

たとえば、当山の歴史の盛衰に目を向けて、これを江戸中期に即して考えてみると、上述の享保四～八年、そしてその後しばらくの期間は、当檀林草創期から元禄のころまでの盛況にくらべれば見劣りはするものの、何とか往古の面目を保ってきたのである。ところが、享保十六年（一七三一）十一月、第二十世運誉和春代における諸堂全消失の大火災は決定的打撃となった。おそらく、その後しばらくの間は千部の開催を見合わせていたに違いない。

『覚書』中の宝暦十三年（一七六三）正月の「覚」に見える、「当山千部再建之儀、未調候得共、施主方達而願ニ付、増上寺表江も相届、来四月朔日より十日迄興行之積ニ候」（同上四巻五五頁）は、その再開を告げるものではないだろうか。明和になると、先の「覚」のほか、同五年から寛政にかけて『日鑑』にも散見されるし、千部修行中の「諸入用」等を記載した『千部録』もみえる。これらを用いて当山における「千部」を覗いてみたい。

（つづく）

発行所　大巌寺文化苑
住　所　千葉市中央区大巌寺町一八〇
電　話　043(261)2917